

# 親子恋行

デート

作 こむろ こうじ

## 【登場人物】

父(三十八歳・四十二歳・四十七歳・五十六歳)  
娘(八歳・十二歳・十七歳・二十六歳)

## 【家族の年表】

1987年 父・母結婚。  
1988年 県立高田病院にて娘生まれる。  
1995年 父と娘、大船渡船にて列車の旅をする。気仙沼市唐桑町の折石を見に行っただと思われる。  
1997年 家族三人で氷上山に登山。生憎の天気で、海を見ることはできず。  
1998年 母、死去。死因は不明。  
1999年 父と二人で氷上山登山。  
2004年 単独、盛岡に来て映画を見ていた娘が父に盛岡までの迎えを要請する。  
盛岡のレストランで食事。  
2011年 東日本大震災。父、娘は難を逃れて無事。  
2014年 娘結婚に向けて、親族同士が会う予定の日に父が倒れ、そのまま帰らぬ人となる。  
父、享年56歳。

## 前景 点としての風景・線としての風景

その瞬間、今までの想いが走馬灯のように駆け巡ると例える場合がある。人の駆け巡る記憶の中で最初に現れるものは、『無』であろう。

その『無』を現すような真っ白な空間からこの物語は始まる。

中央に白い縦長の長方形のオブジェが浮かび上がる。

左右に二つずつ、立方体のオブジェが配置してある。この立体は何かの象徴であるらしい。そして、それらの立方体は想いを広げる『コア』として、存在する。

時間の流れを直線として考えよう。真横からその直線を見れば、時の流れを示す広がりを感じられる。しかし、時間の進行方向からこの直線を見つめてみれば、それは紛れもなく一つの点にしか過ぎない。

この空間は、その直線の進行方向から眺めた、点として揺るぎのない空間である。  
その空間の中に、実存するものとして、一組の父娘が居る。

## 第壹景 二十六歳の風景 (朝の出来事)

気ぜわしく二十六歳の娘が現れる。ストレートの髪は肩を越した辺りまで 長く伸ばしているが、寝起きらしくバサバサのままである。また、寝起ききのようである。

フラフラと、中央の冷蔵庫(白い直方体)に近づき、扉をあける。半開きの目で、冷蔵庫の中を眺め、目的物のペットボトルを見つけると取り出して、肩で扉を占める。

。ットボトルのキャップを取った彼女は、グビッと一口水を飲むと、ポーンとして椅子に座る。  
ふと、壁にあるらしい時計の方向に目を向ける。と、急に目を見開き立ち上がる。覚醒の瞬間である。

娘 ちよつと、父さんも、起こしてくれたって良いのに。まだ、部屋にいるの？今日はキャピタルホテルで、先方の親御さん方に会う大事な日なのに。あああ、やだなあ。

もう一度確かめるように、時計をチラッと見る。

娘 あああ。もうこんな時間じゃないの。どうするのよ。髪だつてまだ、ぐちゃぐちゃよ。…父さん。父さん。まだ寝てるの？

娘は、櫛を取ってきて椅子(立方体のオブジェ)に座り髪を梳かし始め、ぶつぶつと独り言を話し始める。

娘 どうせ、『自分でも手入れができないくせに何でそんなに髪を伸ばすんだ。』って言わんでしょう。わかっているんだから。結婚式には付け髪なんかしないで自分の髪だけで髪を結いたいつて云う女心、わからないだろうなあ。…母さんがいればわかってくれるのになあ。

服の中から、虎目石のペンダントを取り出す。

娘 ……今日も、タイガーアイだけはつけてこうつと。

縞の茶系の模様のある石のペンダントをつけながら、ちらちらと、父親の部屋の方を見やる。

娘 父さん。まだ寝てるの。昨日も遅くまで仕事をしたのはわかるけど。今日は大事な日なのよ。起きてよ。第一印象つて大事だからね、寝起きのぼーつとした顔で行かないでね。

髪を梳かし終えて、エプロンを今度は朝食の準備にとりかかる。

娘 若い時はもつとまめだったのにな。朝起きたら父さんが朝食の準備をしていたのになあ。いつからだろう。私が朝ごはんの用意をするようになったの。そうか、震災の後からか…。

何か納得したような表情になる。

娘 父さん、一人になつても自分でご飯の用意できるのかな…。

(父の部屋の方向に向かつて。)

娘 いい加減に起きてよ！

鍋に水を入れて火にかける。目玉焼きを焼こうとしてフライパンを準備する。再び、冷蔵庫の扉を開ける。

娘 卵無いじゃないの。父さん、いつもなら切らさないようにちゃんと買ってきてるのに。

仕事きついのかな。年齢としも年齢だしなあ。…おつ。鮭の切り身があるじゃないの。これにしようつと。

鮭の切り身をとりだし、冷蔵庫を閉める。鮭の切り身をバックから出して、コンロで焼こうとしながら…。

か 娘 本当にもう。父さん、起きてよ。着て行くスーツの準備はできてるの？まさか、インシャツに、今からアイロンけなきや無いなんてことは無いでしょうね。

娘、たまりかねて、布巾で手をふき父親の部屋へと向かう。

娘 あつちの人達ね。時間にきっちりしているタイプの人だから。…つて言えば、父さんだってそうだよね。どうかしたの。

娘、父親の部屋を覗きこむ。

娘 父さん。

父親の日常的ではない気配に気がつく。

娘 …父さん？

父親の異様な現状に気がつき絶句する。娘は、無意識のうちにペンダントを握りしめている。

娘 ……………父さん！

景色は溶けるように消えて行く。

## 第貳景 八歳の風景（三陸鉄道の夜）

タタンタタン。タタンタタン。

規則正しく、鉄を踏む音が聞こえてくる。

時空の関係性から言えば、十八年の歳月を遡ったことになる。しかし、娘の意識の中では、一瞬にしてその空間に自分の存在が移った。

タタンタタン。タタンタタン。フオワーツ。汽笛が鳴る。

明りがつき始めると、さっきまで中央に立っていた直方体が横に寝かせてあり、ベンチシートのようにになっている。

そのベンチシートに、ひと組の父子が座っている。娘は、外見は大人ではあるが、八歳である。

父は、ほほ笑みながら、窓の外の景色を眺めながら、時々、娘の様子を見ている。

娘 ねえ。

父 ン。

娘 今日は、どこ行くの。

父 海。

娘 海、…怖い。

父 どうして。

娘 去年、泳ぎに行ったときに、父さんが『さあつばあん』って、波をかぶっていなくなっちゃったじゃない。

父 でも、すぐ出てきたよね。

娘 居なくなつたかと思って怖かった。流されたかと思って…。だから、海は怖い。

父 そうか、心配かけてごめんね。

娘 だから、海は怖い。

父 ちゃんと友だちになつていれば、怖くはないさ。

娘 トモダチ？

父 海だつて人と一緒だよ。機嫌の悪い時と、機嫌良い日がある。

娘 そうなの。

父 機嫌の悪いところだけ見て、嫌いになっちゃいけないよ。

娘 でも、

父 今日は、優しい海を見に行くから。きっと、海が好きになる。

娘 きつと？。

父 きつとだ。海はトモダチだ。ほら、見てごらんよ。

二人の視線の先には、青い空とエメラルドの海に、白い雲と白い波がコントラストを出している雄大な三陸の海の景色が広がっている。

娘 うわあああ。  
父 友達になれそうか。  
娘 うん。

タタン、タタン。タタン、タタン。

娘は、その後も景色を見続けようとしたが、海の景色が長く続かないのが三陸海岸の特徴である。すぐ、窓の外は緑だけが覆い尽くす風景となり、つまらなさそうに、父に顔を向ける。

娘 何で、二人だけなの。

父 えっ。

娘 何で、お母さん来ないの。

娘は、ぶすくれて、父親に詰問する。

父 お母さんは、疲れたって。

娘 あたしより仕事が大事なんだ。

父 えっ。

娘 あたしより、仕事が大事なんだ。

父 何だよ、急に。

娘 昨日も一緒に御飯が食べられなかった。

父 仕事だったんだからさ…。

娘 今日は休みなんだから、あたしと遊んでくれたって良いじゃない。

父 具合が悪いって言っていただろう。動けないくらい頭が痛いって言っていただろう。

娘 うん。

父 許してあげなよ。

娘 お父さんは、遊んでくれる。

父 今日はお父さん、元気だからだよ。…お父さんだって、お酒飲み過ぎて朝に起きられない日もあるだろう。

娘 うん。

父 元気になったら、三人で山登りしようか。

娘 山？

父 おべんと持つて。

娘 オベント持つて？

父 バナナとジュースは別で、おやつも300円分持つて。

娘 バナナとジュースは別だね。

父 それなら、良い？

娘 …良い。がまんする。

父 良い子だ。

娘 …母さん、あたしのことが好きかな。

父 そりゃあもちろん、母さんもお前が大好きだよ。

娘 どれくらい。大好きなのかな。

父 これくらいかな。

両手を肩幅に広げる。

娘 ちっちゃい。もっとお。

父 これくらい。

両手を精一杯広げる。

父 お父さんがお前を好きなのと、同じくらいだ。  
娘 じゃあ、許してあげる。  
父 ありがとう。  
娘 どうして、お父さんがありがとうなの。  
父 だって、大好きな奥さんが許してもらえるから。  
娘 あたしも、お母さん大好き。  
父 どれくらい。  
娘 お父さんよりも、もっといっぱい。  
父 お父さんの方がいっぱいいっぱいだ。  
娘 じゃああたしは、いっぱいいの、いっぱいいの、いっぱいいのいっぱい！  
父 負けました。  
娘 やったあ。勝った。

娘、無邪気に喜ぶ姿を、ほほ笑みながら父が見る。

タタンタタン。タタンタタン。

娘 お母さん。大丈夫かな。  
父 大丈夫。ゆつくり寝ていれば治るよ。  
娘 どうして、そんなにがんばるの。  
父 仕事だから。  
娘 仕事なんか辞めちゃえばいいのに。  
父 ん〜。  
娘 そしたら、あたしが学校から帰ってきたら家にいるし、お母さんは疲れないし、お父さんはご飯を作らなくていいし、良いことばかりじゃん。  
父 大変だけど、楽しいんだって。  
娘 大変だけど、楽しい？  
父 出来なかった縄跳びを、うんと練習して出来た時、どんな気持ちだった。  
娘 やったあ。って気持ち。  
父 そんな感じだと思つてよ。大変だけど、がんばればやったあっていう気持ちがいっぱいになる。だから、大人は仕事をがんばるんだ。  
娘 そうなんだ。  
父 そうなんだ。…そうなんだよな。……また、お前に良いこと教えてもらった。  
娘 何も教えて無いよ。  
父 教えてもらった。だから、おまえといると、お父さんはどんどんお父さんになれる。どんどん、大人になれる。  
娘 大人じゃん。  
父 ガンダムプラモデル作ってるけどね。  
娘 やっぱ、子どもじゃん。  
父 そう。まだまだ、子ども。  
娘 あたしと一緒にだね。  
父 そう、一緒。  
娘 だから、仲よしなんだ。  
父 そう。だから、仲よしなんだよ。…そうだ、良いもあげる。  
娘 良いもの？

父、ポケットから虎目石のブローチを取り出す。

娘 わあ。宝石だ。宝石だ！

父 あげるよ。

娘 貰っていいの。

父 いいよ。  
娘 欲しかったんだ。ねえねえ。魔法の石なんでしょう。  
父 そう。  
娘 お父さんも、魔法使いみたい。なんで、この石をあたしが欲しいってわかったの。  
父 石の店に行った時、顔に書いてあった。  
娘 何て？  
父 これ欲しいって。  
娘 顔のどこに。  
父 右のほっぺに。

娘、考えて左の頬を隠す。

父 そつちは左。右はお箸を持つ方。

娘、あわてて、右の頬を押さえる。

娘 これ、何て言う名前なの？

父 タイガーアイっていう石なんだ。何でも見ることが出来る魔法の力があるんだって。

娘 何でも見えるの。

父 ああ。

娘 明日のこともみえるの。

父 その気になれば、見ることが出来るかもしれないけど、…見ない方が良くも。

娘 どうして。

父 わかつちやうと、つまんだら。

娘 そうか。

父 わかつちやうと、哀しいこともあるかも知れないし。

娘 …じゃあ。見ない。…昔のことは見ることが出来るの？

父 石を持って、思い出したい日のことを考えれば、きつと見ることが出来るよ。

娘 やってみる。

娘、石をぎゅつと握りしめ、目を閉じて、息を止める。

しばらくして、荒く息を吸いはじめる。

娘 お父さん。何にも見えないよ。

父 まだ、生まれたばかりだからだよ。

娘 もう、六歳だよ。

父 何も見えなかった？

娘 うん。真っ暗だった。

父 それは、お母さんのおなかの中にいた時の様子が見えたんだ。だから、真っ暗。

娘 そうか。

父 大人になって、今日の日のことを思い出したくなったら、その石を握りしめてごらん。きつと、思い出せるから。

娘 わかった。

父、満面の笑顔で、娘の頭をくしゃくしゃと、撫でてあげる。

タタン、タタン。タタン、タタン。

車内に停車を告げるアナウンスが入る。

『次は、\* @ ※ ~ \* \$ 。 \* @ ※ ~ \* \$ 。ホームは進行方向右側でございます。お降りの方は忘れ物のないよう、ご注意ください。次は、\* @ ※ ~ \* \$ 』  
なぜか、駅名は聞き取れない。記憶に無いからだ。

キーツ。シニューウウウツ。  
汽車が停まる。

娘 誰も乗らないね。

父 乗らないね。

娘 誰も降りないね。

父 降りないね。

娘 どうして、ここに停まるの。

父 どうして？

娘 誰も乗らないのに。誰も降りないのに…。

父 …ん。忘れられないようにじゃない。

娘 忘れられないように。

父 ここに汽車が停まらないと、ここに街があるってことを忘れられちゃうじゃないか。

娘 …そうだね。汽車が停まらなかつたら、ここに来られないもんね。

父 そう、来られない。一番、怖いことは、忘れられること。忘れられるって、無くなるのと一緒だもんね。

娘 街を忘れちゃだめだね。

父 でも、人は自分と関係が少なくなると、忘れてくる。

娘 忘れちゃ、かわいそうでしょ。

父 そう、かわいそうだ。…お父さんのことも、忘れないでくれよ。

娘 忘れるわけ無いでしょう。何で、忘れるの。

父 好きな人ができて、その人のことで心がいつばいになれば、忘れるかもよ。

娘 忘れないよ。だって、お父さんが一番好きだもん。

父 大人になれば変わるんだ。

娘 変わらない！

父 変わるな。

娘 変わらないっ。

ぴーっ。と笛の音が聞こえる。ドアが閉まり、列車が動き出す。

タタタタ。タタタタ。タタタタ。タタタタ。タタタタ。タタタタ。タタタタ。

娘、ちよつと泣きそうになっている。

父 ごめんね。強く言いすぎた。

父、娘の頭をくしゃくしゃと撫でる。

娘 …お父さんは、私のことを忘れるの？

父 忘れるわけないだろう。

娘 おじいちゃんになつても。

父 ああ。

娘 ガンダムの名前を忘れても、忘れない？

父 忘れない。

娘 ご飯を食べるのを忘れるようになっても、あたしのごことは忘れない？

父 もちろん。

娘 …お父さんがあたしのごことを忘れないんだったら、あたしもお父さんのことを絶対忘れない。

父 信じて良い？

娘 信じていい。

父 父さんは、生きていく日の最後の日まで、お前のごことは忘れずに考えている。

娘 約束だよ。

父 約束する。

娘 絶対だよ。

父 絶対だ。

タタン、タタン。タタン、タタン…。

娘 あつ。トンネルだ。暗いの怖い…。

父 大丈夫だ、父さんがついている。

ピーツ。と汽笛が鳴る。

列車がトンネルに入ると同時に、暗 転。

## 第貳景 十二歳の風景 (氷上山)

時空は娘が十二歳に飛ぶ。

暗転の中、山鳥のさえずりが聞こえてくる。

娘 もう。

父 そう、ぶすくれないで。

娘 宿題もあるんだからね。

父 氷上山にお父さんと登りました。つて日記に書けばいいじゃない。

娘 そりゃあ、そうだけど。

父 もっと必要なら、父さんが教えてあげるよ。

娘 何？

父、周りの景色を見渡す。

父 この植生を見てみなよ。

娘 えっ。

父 稜線の左側は、針葉樹。右側は落葉樹。

娘 それが、何。

父 アカマツはアカマツの場所、ブナはブナの場所。でもブナの中にはカバも入っている。多民族国家だ。

娘 そう言われて見ると仲間たちで集まっているね。

父 植物は何も語らず、ひっそりとその住処を分かち合っている。人もそうでありたいね。

娘 それをひとり勉強ノートに書けばいいわけ。

父 それは、良いな。

娘 植物の植生なんて、小学校では習いません。

父 中学校でも高校でも習いません。

娘 えっ。

父 学校で習うことは、ほんの少しのことだ。教えられたことを覚えることよりも、自分でもできる勉強の仕方を身につけることが大事なんだ。

娘 また、始まった。お父さんは、何でも知っていて偉いんだね。

父 尊敬した。

娘 結構、いやみのつもりだったんだけど。

父 単純に誉められたと思った。

娘：お父さんは幸せだね。

父 はい、幸せです。

娘 お母さんが居なくなっても、そんなにぐこんでないし。

父 ぐこんでいてお母さんが、もどつてくる(生きかえる)のなら、いくつでもぐこんみます。

娘 ポシティブだね。

父 はい、そうです。

娘 しかし、9年生の娘と山登り何かする？

父 ついてきてくれてありがとう。

娘 お母さんとの約束だから。  
父 来年も一緒に登ろうねって言ったお母さんの言葉を覚えていてくれたんだ。  
娘 あたりまえでしょう。記憶力は良いんだから。  
父 そりゃあ、忘れ物をしやすいお父さんとしては頼もしい。  
娘 忘れ物しないじゃん。  
父 忘れないように、全部ノートにメモをしておくんだ。  
娘 案外努力してるんだ。  
父 努力は、見えないようにしてないとカッコ悪いからね。  
娘 そうだね。山登り、二人だけになっちゃったけど。  
父 三人だ。  
娘 三人？  
父 このあたりにお母さんが居て、お前を見守ってくれている。

娘、父親の刺した方向を見やる。

娘 そうだね。

娘、にっこりほほ笑む。

二人、足場の悪い場所にさしかかる。

父 ここも道は、こないだの大雨で大きく削られているから気をつけて。  
娘 わかっているって…。きやつ。

と、言いつつ、娘、足を滑らせて転ぶ。

父 大丈夫か。

娘 いててて。まあね。お母さん、ちつとも見守ってくれてないよ。  
父 ほら。

父、娘に手を差し伸べる。

父 お母さんの仕事は見守ることで、お前を守るのはお父さんの仕事だ。  
娘 …ありがとう。

娘、父の手を取り立ち上がる。

娘 あいてて。もう、山には来ないよ。

父 そう言うなって。海を見られる所に来たらまた、違う気持ちになるって。  
娘 そうかな。また来るんなら、お父さん一人で来てよ。

父 じゃあ、次は孫と来る。  
娘 孫？

父 お前の子どもだ。  
娘 もう、何年先のことを言ってるの？タイガーアイ持ってないのに、そこまで見えるの？

父 これは、俺の夢。  
娘 夢？

父 娘の同じ思い出を、孫にもしてあげる。夢。

娘 何年も何年も先なんだから、忘れないように、ちゃんとメモしておいてよ。  
父 はい。わかりました。

二人、黙々と歩きます。

父 もう少しで、海が見える。がんばれ。  
娘 一昨年は見た覚えが無いよ。  
父 お母さんと来たときは、ガスがかかっている、海が見えなかったからね。

父、白い箱の上に登り一息ついて、海を見やる。

父 ほら、今日は絶景だ！

娘 ……本当だ。

父、深呼吸をする。

父 ふふうう。風が気持ちいいなあ。

娘も深呼吸する。

娘 空気が甘い。

父 良い眺めだろう

娘 うん。良い。列車と違って、景色が消えない。

父 来た甲斐があっただろう。

娘 まあね。…お母さんにも見せたかったな。

父 ……見えているよ。

娘 えっ。

父 お前の眼を通して、お母さんにもきつと見えているよ。

娘 そうだね。

娘、父にほほ笑みかける。

娘 忘れないよ。この高田松原の景色。

父 父さんも忘れない。

娘 孫娘にも絶対見せてよ。

父 孫は、娘か？

娘 孫娘の方が連れて来がいがあるでしょう。

父 それもそうだな。デート気分だな。

娘 絶対だよ。

父 夢だな。

娘 夢にはしないで。

父 でも、この景色はみせたいな。

娘 お父さんが無理だったら、私が連れてくる。

父 そうか。

娘 お父さんがしてくれたことは、私も娘にしてあげる。

父 それは良いことだ。

娘 そうすれば、忘れられない家族の思い出と、生まれた街の思い出がずっと残るから。

父 残って欲しいね、家族の思い出とこの故郷の景色。

娘 きつと、残るよ。この景色を見た人たちの心の中には…。

父 そうだね。

父、にこりと娘に微笑みかえす。

娘、もう一度海岸線に目を向け、その景色を目の奥に焼きつけようとする。

遠くて聞こえるはずもない、砂浜の波の音が微かに聞こえてくるような感じを残しつつ、氷上山の風景は記憶の波間に消えてゆく。

## 第参景 十七歳の風景 (レストランにて)

娘の記憶はまた流れ出した。そして、その記憶は十七歳の時点で立ち止まった。それは、彼女の想いの中ではとても重要な景色が存在するからだ。

車が往来する音が聞こえる。

街角を彩るイルミネーション。

さりげなく流れてくるクリスマスソング。

年の瀬を感じさせる記憶が断片的に点在する。

娘が現れ、舞台中央のオブジェ(ここでは街角のベンチ)に、腰を下ろす。

娘は、髪を後ろで一つに結わえている。快活な娘は運動部に所属する高校二年生だ。本来は髪を短く切らなければならぬ。しかし、自分の実績をかざして、娘は髪を切ろうとはしない。

娘は、人を待っている。

そこへ父親がやってくる。コートを羽織って、大きな鞆を抱え、いかにも仕事が終わって飛んでやってきたという風情だ。

父 お待たせ。

娘 本当に来たんだ。

父 人をおいでおいて、本当に来たんだって言い方は無いだろう。

娘 だって。普通さ、無断で遠くの町まで映画を見にやってきて、列車に乗り遅れた娘を迎えに来る？

父 来ない。

娘 でしょう。

父親、ため息を一つして、娘の口調を真似して話し始める。

父 普通さ、だからって父さんの職場に電話かけてくるか？

娘 こない。

父 そうだよな。叱られると思って電話なんかかけないよな。

娘 ごめん。

父 素直でよろしい。俺が、お前の母さんを好きになったのは、『ごめんなさい。』が言える人だったからだ。良いところが似たな。

娘 ……仕事、忙しかったんでしよう。

父 それをわかっていて呼んだのは誰だよ。

娘 だって。

父 お前なあ、そうやって親の愛情を試すやり方は良くないよ。

娘 そんなことして無いもん。

父 父さんにはわかったよ。何時間もかけて迎えに来させるようなことしてさ。

娘 そんな！何でもお見通しですよって云うような言い方はしないでよ。タイガーアイじゃあるまいし。

娘、服の上から、タイガーアイのペンダントをギョツとつかむ。

父 仕事柄なのかな。人の気持ちを先々に読んでしまうんだよな。

娘 読まれてない。

父 怒っているのが凶星の証拠だ。

娘 何で、そんな言い方するの。父さんは神様なわけ。何でもお見通しなわけ。私の心の奥の奥まで見えるってわけ！

父 悪かった。

娘 謝らないですよ。かえって馬鹿にされてるような気分になっちゃうじゃないの。

父 同じようなことを、母さんからも時々言われた。悪い癖かな。

娘 悪い癖には違いないな。

父 そうだな。…まず、行こう。  
娘 帰るの。  
父 せっかくなこまで来たんだから、飯でも食つていこう。  
娘 良いの。  
父 家に帰ってから、飯を作るのは誰？  
娘 父さん。  
父 今日はお前が作るか。  
娘 嫌だ。  
父 話は決まった。行こう。

二人、歩きながら話し始める。

娘 何食べる。  
父 父さんが若い頃に良く行った店があつてさ。  
娘 デートで。  
父 まあな。  
娘 母さんと。  
父 残念ながら…違うんだ。母さんと出会う前。母さんには内緒だぞ。  
娘 わかつてるつて。  
父 そう言いながら、どうせ帰ったら母さんの写真に向かって全部話すんだろう。  
娘 また、始まった。お見通しな言葉。  
父 ごめん、ごめん。  
娘 でも、やっぱり当り。話しちやうと思う。  
父 ほらな。  
娘 でもさ、母さんはそんなこと気にしないと思う。  
父 なんだお前、わかつた振りして…。  
娘 私のところにも、そう思えるような人がひよこり現れないかな…。  
父 お前、彼氏も居ないの。  
娘 居て欲しいわけ。  
父 まあ、難しいところだな。娘としてみれば手は出して欲しくないけれど、女としてみれば、こんな美人を放つておく男たちの気が知れない。…待てよ、外見だけじゃないところをちゃんと見ぬいてるつていうことも言えるな。  
娘 一言多いなあ。  
父 ちよつと撤回。手を出すつて言つたけどそれは…。

娘、手を差し出して父の話を止める。

娘 『エッチは、間違つて子どもが出来ても育てられるようになってからにしないさ。』  
父 よ。でもさ、相手が居なきやどうしようもないなしよう。  
娘 まあ、良いけどさ。そんな話、良くこんな街中でできるな。尊敬するよ。  
父 あなたの娘ですから。  
娘 流石に俺は時と場を考えるぞ。

娘、父親の顔をのぞき込んで…。

娘 恥ずかしかった？ごめん。  
父 いや、もう慣れた。

父親、ある店先で立ち止まる。

父 あつ、こいだ。

ドアを開くとカウベルの音が響き渡る。  
父、長方形のオブジェの後ろ側に重なるように置いてあった二つの正方形のオブジェを取り出す。するとそこには、テーブルを挟んだ、二つの椅子の景色が広がる。

娘 なかなか良い店じゃない。

父 知った振りをするな。比べるほど、いろいろな店には行っていないだろう。

娘 まあね。

父 何を食べる。

娘 父さんがこの店で食べたいもので良いわ。

父 そうか。実は、父さんはこの店で初めてステーキというものを食べた。

娘 贅沢したわね。

父 それが、二千円からお釣りが来るくらいで、スープから始まって、コーヒーまで出るんだ。

娘 じゃあ、それにしようよ。

父 今でも、同じ値段だと良いんだけどな。

父親、店員に注文をする。

しかし、そこには店員はいない。娘の記憶の中で重要なのは父親が自分の思い出の料理を注文したということであって、その注文を受けた人物には、想いが無いからである。

父 驚いたことに、値段は殆ど変わっていないよ。

娘 それは良かった。

二人、ちよつと姿勢を正す。どうやらスープが出てきたらしい。

父 このコーンスープが心底あったまつて、たまらなく美味いね。

娘 ン。おいしいね。こんなところで父さんは何回も食事をしたんだね。

父 まあな。

娘 いいな。

父 お前は、どうせ俺よりいいものをこれから沢山食うんだ。

娘 そうとは言えないでしょう。

父 この先のことを考えれば、俺の方が先に死ぬんだ。

娘 そんなことはわからないわ。私だつて何時死んじやうかわからないじゃない。

父 それは、とても親不孝なことだ。どんな目にあつても、死ぬ気で生きろ。

娘 死ぬ気で生きろとはどういうことじゃ。

父 どんなことが有つても生きることを諦めるなつていうことだ。

娘 事故でも。

父 事故でも。絶対諦めるな。

娘 何で。

父 親としての幸福は、子どもに看取られて死ぬことだ。

娘 我儘。

父 我儘でも、何とでも言え。それが父さんの最大の願いだ。

娘 父さんもね。

父 えっ。

娘 私のウエディングドレス姿も見たいし、孫の顔も見たいでしょう。

父 まあな。叶わない夢になるかもしれないけど。

娘 それつて、私は結婚できなつて言う意味？

父 違うよ、違う。

娘 まつたくももう！

今度は前菜が来たらしい、フォークとナイフを持って食べ始めた。

人間、欲が無くなったらおしまいね。

そうだな。

父さんは欲だらけだけどね。

それは誉め言葉か。

私の子どもなんてできたら、もうべつたりなんだろうなあ。おじいちゃん。

そうだな。

私はバリバリ働くつもりだから、孫ができたら、一日中預けるからね。

本望だ。母親の顔を忘れても、爺さんの顔は忘れないように教育してやる。

そうだ。山にも連れて行ってくれるんでしょう。

そんなことは言っていない。

父 言った。言った。覚えてないの。『もう山に何か登らない。』って言ったなら、『そしたら、孫と行くから良い。』って言った。

父 そんなこと、言ったっか。

娘 言った。言った。中一の時の春だったよ。そうそう、高田松原が綺麗だった。

父 ……。

娘 見慣れている風景だったけど、この景色はちゃんと見て、心に焼き付けておかなきゃって思った。故郷の景色だもん。

父 大人みたいなことを言うなあ。

娘 覚えていないの？山の植生とか、父さんの講釈が始まったんで、軽く嫌味を言ったら、いなされた。

父 良く覚えてるな。

娘 忘れた？私はある日のことを昨日のことのようにちゃあんと思い出せるんだけどな。

父 ……言ったかもしれないな。

娘 そうでしょう。思い出してきた？

父 十代の記憶力にはかなわん。俺は去年も、十年前も時々ごちゃ混ぜになる。

娘 年齢だね。私のことは忘れないですよ。

父 もちろんだ。生きている日の最後の日まで、お前のことは忘れずに考えている。

娘 それ、小さいときに列車の中でも言った。

父 良く覚えてるな。

娘 案外、記憶力だけは良いんです。

父 記憶力だけはな。

娘 一言、多い！

父 お前が自分の子どもを山に連れて行って松原の景色をみせるプランはどうなった？。

娘 父さんが連れて行けない時にはちゃんと私が連れてくから。10年後、まだまだ、父さん、元気だよ。まず、その時になつたらよろしくね。

父 2歳には、子どもが居るのか？

娘 タイガーアイがそう言ってる。

父 すごいな、そのタイガーアイ。300円なのに。

娘 ええつ。そうなの。…聞かなきゃよかつた。

父 父親、運ばれてきたらしい料理に目をやる。

父 おつ、来た来た。

娘 目の前に、肉料理が並べられたようだ。娘の目がキラキラと光っている。

父 これであの値段なら安いよ。また来ようね。

娘 その言い方、母さんそっくりだ。

父 約束してよ。

娘 約束する。でもさ、今回のようなことはするなよ。体がいくつあって足りないよ。

娘 反省しています。

二人、笑顔で食事を続けている。

娘 なんだかデートみたいだね。

父 デートだろう。

娘 とデートして楽しい。

父 その言葉は、そのままお前に返すよ。

いつの間にか二人はコーヒーを飲んでいる。

父 夜にコーヒー飲んで眠られなくならないのか。

娘 父さんの子ですから、飲んでも飲まなくても宵つ張りです。

父 そうだな。…行くか。

二人、席を立つ。

父は、カウンターで勘定を払う。娘は、カウンター越しの店員に向かって、小さく『ちそうさまでした。』と、声をかける。

カウベルの音が鳴る。

目が慣れるまでの暗闇。

目が慣れてくると、店を出た二人を降ってくるような星空が包み込んでいた。

娘 寒い夜つてどうして星が綺麗なんだろう。

父 星たちにとっちゃあ、この寒さが、コーヒーと同じ目覚ましになるんだろうよ。

娘 あつ。おうし座の角。

父 昂。

娘・父 プレアデス散開星団！

父 よく知ってるな。

娘 ピアノの帰りに父さんが教えてくれたんじゃない。

父 そうだっけ。

娘 『父さんの星座、おうし座の角。チカチカしていて、思いつきも早いけど、忘れるのも早い。』ってね。言ったじゃない。

父 忘れたよ。でもその通りだな。

…あの星たちは生まれたばかりの星たちだ。親の星が死に絶える時に産み落とした星たちだ。

娘 へええ。

父 星たちはかわいそうだ。

娘 どうして。

父 自分たちの子どもの顔を見ることはできない。

娘 そうだね。

父 それに比べれば、俺なんかよっぽど幸せだ。こうして娘と星空を眺めることができる。

父親、星空を見つめながら深く深呼吸をする。

辺りは青白い闇に包まれる。

父 さあ、帰るか。

娘 最後は、一緒にドライブか。

父 …いや、帰るところは別々だ。

娘 どうして。家に帰らないの。

父 俺はもう家には帰れない。

娘 そうしたら、私も帰れないじゃないの。  
父 大丈夫。  
娘 えっ。  
父 タイガーアイがあるから。  
娘 えっ。

娘、ペンダントを確認する。

父 …お前はお前の世界へ帰れ。俺は俺の新しい世界へ帰るから。  
娘 どう言うこと。  
父 …お前の花嫁姿…見たかったな。  
娘 えっ。  
父 一人にさせちゃうな。強く生きろよ。  
娘 父さん。何言ってるの。じゃあ私はどうやって帰れば良い訳。  
父 帰れるよ。タイガーアイが帰してくれる。  
娘 えっ。  
父 タイガーアイは、自分にとって本当に必要なところへと導いてくれる。

娘、ペンダントがあることを握る。

娘 父さん。…どこ行くの。  
父 どこへも行かない。これからはずうっとお前の傍にいるよ。  
娘 父さん…。  
父 楽しかったよ。お前との親子デート。娘とこうやってデートすること…父さんにとっては夢だったんだ。  
娘 ………。  
父 ありがとう。お前が自分の娘であることを嬉しく思うよ。  
娘 ………。

父、すつと一步後ろへ下がる。

娘 父さん。どこ行くの。行っちゃ嫌だ！  
父 じゃあな。  
娘 父さん。父さん！

そのまま父親は暗闇の中に消え去って行く。

娘、その場にしゃがみこんで泣きじゃくる。

#### 第四景 別れの風景（病院の一室）

娘が一人、自分の首にかけたペンダントを握りしめ、しゃがみこんでいる。

娘二十九歳の時空に舞い戻った。

ここは病院の病室らしい。

微かに心臓が鼓動していることを知らせる電子音だけが、思い出したように時々静寂を破る。

娘 何時か、そんな日が来るとは思っていたけれど…。そんな日は永遠に来るはずは無いと心のどこかで思っていた。それは、自分自身が現実から逃避していただけのこと。十七歳の時に話されたわがまま。それが今、目の前で現実のものとなっている。受け入れられるはずは無い。しかし、受け入れなければならぬこと。その時が、近づいている。

父の傍らに歩みより、じつとその顔を見つめつづける。

娘 逃げ出したい。この場所から。でも、逃げ出せない。この場から。

私はここにいなければならぬ。それが、あなたの娘としての最大の勤めであるから。

娘、父親の手を取って…

娘 汽車の中で、髪の毛をくしゃくしゃつとしてくれたその手は、とても大きなものだった。氷上山で転んだ私に差し伸べられた手。それはまるで、私の体をすっぽりと包み込んでくれるほどにまだまた大きな手だった。その手が、今では私の両手にすっぽりと収まっている。もう、私を包み込んでくれることはないんだ。父さん…。

娘、父の手を握り締めるようなそぶりです、そつと両手で包み込む。

娘 タイガーアイが無くて、何でもお見通しだった父さん。自分のことはお見通しじゃ無かったの？…もしかして…、わかつてたんだ！私が、八歳の時の列車の中でも、十二歳の時の氷上山でも、十七歳のレストランでも、そして、今も…。だから、その時、その時で精いっぱい、私を愛してくれていたんだ。何で、今までそれに気がつかなかつたかな。そこまで、お見通しだから、私にタイガーアイをくれたの？いつも、いつも、私のことを考えていてくれたんだね、父さん…。

その時、生の営みを告げる電子音のリズムが途切れ、直線的に響き始める。

娘、目を見開き、息を呑む。

娘、握りしめていた手をそつと離し、もう一方の手と合わせ、胸の上で組ませる。

娘 父さんの願い通り、私は父さんの最後を看取ったよ。父さんが幸せならそれで良いけど…。それで良いけど…。残された私には辛過ぎるよ。自分の幸せのためなら娘を犠牲にしても良いって言う訳？。

私のウエディングドレス姿も見たいし、孫の顔も見たいでしょう。その夢は叶わないかもしれないってどうしてそんなことを言ったのよ。その日が今日だって、知ってたの？

つと落ちる一筋の涙。

娘 『悲しさも、生きる糧になる…。』どうせまた、そんなことを言うんでしょう。父さんが言いたいことぐらいは、私にもお見通し何だから。でも、でも、そんなことを言われたって、苦しいくらい悲しいことには変わりはないよ。

すつと立ちあがる。

娘 孫が生まれたら、あなたの娘に負けないくらい立派な人に育てるから。私の傍にいて大きな手を差し伸べてね。ずつと…。ずつと…。

娘、ある方向を見据える。娘にはその先に、ほほ笑む父親の笑顔が見えているに違いない。

娘 父さん…。

娘、父親への想いを胸に、力強く前を見すえて歩き出そうとする。

二人の直線はここで終わる。しかし、交差する新たな直線が、また真つ直ぐに延びていくこうとしている。

終 演